

生きる力、赦す力

齊藤

諒

その日、僕は電車を降り、自転車で学校へ急いだ。「あっ！」車に跳ね飛ばされ、地面に頭から叩きつけられた。足の感覚を感じる事ができなくて、後ろから来た後輩に、

「足はあるか？」

と聞いた。手もきかないので、携帯で母に連絡してくれと頼んだ。救急車に乗せられて、浜松医療センターに運ばれた。

集中治療室での僕は、首を固定され身動きが取れない。窓もなく日も当たらない部屋。見えるのは何本かの点滴の管だった。相変わらず足の感覚がない。

「足はあるのか？見せろ！」

と、両親に何度も聞いていた。

その日の夜になり、容体が急変し、呼吸ができなくなった。目の前はテレビ画面の砂嵐のような状態になり、耳からは何の音も聞こえない。孤独で意識が遠のいていく中、「ああ、ここが死ぬのか」と思った。緊急処置で、気管切開をし、人工呼吸器が装着された。

二〇〇八年一月二八日のことだった。

僕は首（頸椎）を骨折し、手足が完全に麻痺して動かなくなってしまうた。呼吸すら人工

呼吸器がなければできない。口から食べる事ができず、鼻から管を入れて胃に流動食を流し込むだけだ。尿も便も自分の意思とは関係なく出てしまい、おむつ無しでは生活できない。ただ上を向いて寝ているだけだ。どれほど辛く屈辱的だったか。「こんな生活が一生続くのか。死んだほうがましだ！ただけど、自分で死ぬ事もできない…」惨めな自分に絶望し、生きる気力が失われていった。

小学四年生の時から野球一筋で、県立浜松商業高等学校の野球部の二年生だった僕は、夏の大会も終わって先輩が引退した後、正捕手になり、来年の甲子園出場を目指して意気込んでいた。その僕が、どうして今こんな事故に…。

僕の家は、父、母、姉、そして祖母の五人家族で、どこにでもある普通の仏教の家庭だ。家族全員が必死だったと思う。いろいろな宗教の癒しに頼った。両親は僕のために、多額のお金を宗教に費やした。でも、無駄だった。どの宗教も独り善がりで効果はなく、絶望感がが増した。

加害者は二七歳の男性だった。

「僕をこんな目に合わせて、どうしてくれるのか！」

ただ怒りしかなかった。しかも、自動車保険の期限切れで、賠償金が一銭も出ないと知った。加害者と彼の父親が病院に見舞いに来た。姉は、

「諒の人生を返せ！元通りにしろ！一生同じ苦しみを負わせてやる！」

と食ってかかり、父は、

「見舞いに来る暇があるなら、働いて金を持ってこい！」

と追い返した。加害者の高齢の祖父も来てくれたが、母は、

「顔も見たくない！」

と、やはり追い返した。

四か月ほどして、兵庫県の関西の病院に転院する事になった。リハビリの施設が整っているからだ。僕の身体に負担がかからないように、ドクターヘリで移送される事になった。母と姉はその病院の近くに家を借りて、毎日僕の世話をしてくれた。

「転院した事で、人工呼吸器を喉から鼻に替える事ができた。それによって、口から食べる事ができるようになった。何より、声を出して会話をする事ができるようになり、うれしかった。しかし、医師は僕に、

「齊藤君、あなたの体は今の医学では治す事ができません。現実を受け止める事は難しいと思います。だけど、自宅に戻れるように、五か月間ここでリハビリをして日常生活ができるようにしていきましょう」

と宣告した。うれしさもつかの間、その時、僕は大声で泣いた。

医師、看護師、理学療法士、作業療法士が、小さな事から始めた。首を上げるだけでも、今日は一秒、翌日は二秒という具合に。ずっと寝たきりだったが、車いすに移動できるようになった。また、特別なソフトを使って、パソコンのカーソルをあごで操作する訓練も受けた。

そんなある日のこと、車いすの外出訓練で、病院のすぐ近くにある憧れの甲子園球場に連れて行ってもらった。誰もいない球場のグラウンドで、二度と野球ができない現実を突きつけられた。

ユニフォームを着て自分の足で来たかった…悔しさで涙が出た。

事故から五か月経った二〇〇九年四月四日。辛くて死にたい絶望的な僕の人生に、光が差し込んだ。野球部の先輩が、そのお母さんとお姉さん、さらに彼らの牧師とその二人の娘さんと一緒に兵庫の病院に来てくれた。彼らはクリスチャンだった。牧師は女性で、自身も難病から癒されて、信仰を持ち、牧師になったという。品のあるお母さんというような感じの人だった。

「諒君、この世界には目に見えない様々な種類の悪霊がいます。その悪霊が、人間を翻弄して、病気や事故、けんかを引き起こしたり、人を恨んだり批判したり、殺したくなるような思いを持つてくるのです。その悪霊を追い出すことができ、唯一悪霊に勝利されているのが、神の子イエス・キリストです。キリストとは、救い主という意味です。聖書は、神の言葉であり、イエス・キリストのことが書かれている本で、世界のベストセラーです。悪霊が出て行けば、必ず諒君は癒される。世界を造った、ただひとりの真の神だけが、諒君の体を元のようにする事ができます。」

【聖書より】マルコによる福音書第一章二五節―二七節

【イエスはこれをしかって、「黙れ、この人から出て行け」と言われた。すると、けがれた霊は彼をひきつけさせ、大声をあげて、その人から出て行った。人々はみな驚きのあまり、互に論じて言った、「これは、いったい何事か。権威ある新しい教だ。けがれた霊にさえ命じられると、彼らは従うのだ。】

ヨハネの第一の手紙第三章八節

【神の子が現れたのは、悪魔のわざを滅ぼしてしまつたためである。】

また、牧師は聖書を読んで、イエス・キリストがたくさんの人の病気を癒した話をしてくれた。

マルコによる福音書第五章二五節―三四節

【さてここに、十二年間も長血をわずらっている女がいた。多くの医者にかかつて、さんざん苦しめられ、その持ち物をみな費してしまつたが、なんのかいもないばかりか、

かえつてますます悪くなる一方であつた。この女がイエスのことを聞いて、群衆の中まぎれ込み、うしろから、み衣にさわつた。それは、せめて、み衣にでもさわれば、なおしていただけるだろうと、思っていたからである。すると、血の元がすぐにかわき、女は病気がなおつたことを、その身に感じた。イエスはすぐ、自分の内から力が出て行ったことに気づかれて、群衆の中で振り向き、「わたしの着物にさわつたのはだれか」と言われた。そこで弟子たちが言った、「ごらんとおり、群衆があなたに押し迫つていますのに、だれがさわつたかと、おっしゃるのですか」。しかし、イエスはさわつた者を見つけようとして、見まわしておられた。その女は自分の身に起つたことを知つて、恐れおののきながら進み出て、みまえにひれ伏して、すべてありのままを申し上げた。イエスはその女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救つたのです。安心して行きなさい。すつかりなおつて、達者でいなさい。】

使徒行伝第二章九節―一二節

【ユテコという若者が窓に腰をかけていたところ、パウロの話がながながと続くので、ひどく眠けがさしてきて、とうとうぐっすり寝入つてしまい、三階から下に落ちた。

抱き起してみたら、もう死んでいた。そこでパウロは降りてきて、若者の上に身をかがめ、彼を抱きあげて、「騒ぐことはない。まだ命がある」と言った。そして、また上がって行って、パンをさいて食べてから、明けがたまで長いあいだ人々と語り合っ、ついに出発した。人々は生きかえった若者を連れかえり、ひとかたならず慰められた。】

その時のことは、僕にとって、初めて経験するような奇跡だった。そんな話は思いもよらない事だったのに、なぜかそれを信じる事ができた。その場にいた僕の家族も同じだった。

マルコによる福音書第一〇章二七節

【イエスは彼らを見つめて言われた、「人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである。】

さらに、牧師は、

「加害者を赦すことは、生身の人間にできる事ではありません。ましてや、諒君にそれを求めるなんて酷な話です。でも、人を憎んだまま生きるのも苦しいですよ。たとえ、相手が死んだ

としても、憎しみは消えません。聖書は悪霊の存在をはっきりと教えています。罪を憎んで人を憎まずという言葉がありますが、まさにその通りで、憎むべき相手がいるとするならば、それは人ではありません。悪霊によって起きた事故なのだから、悪霊を憎んで、加害者を赦すのです」

と話してくれた。そして、僕の家族にも、イエス・キリストによって全ての人間の罪は神に赦されたのだから、加害者を赦す事が神に求められる事だと静かに話してくれた。

エペソ人への手紙第四章三一節―三二節

【すべての無慈悲、憤り、怒り、騒ぎ、そしり、また、いつさいの悪意を捨て去りなさい。互に情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互にゆるし合いなさい。】

マタイによる福音書第六章一四節―一五節

【もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、

あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう。】

牧師の話は、今まで聞いてきた宗教や神々の話とは全く違う感覚で、僕はなぜか自然と涙があふれた。

「イエス・キリストを信じて癒しを受けるのか、それとも今まで付けてきた悪霊の数珠に頼って行くのか、どちらを選ぶ?」
という牧師の問いに、

「僕はイエス・キリストを信じます。生きて、悪霊を追い出して、必ず自分の足で歩けるようになります!」

と答えた。僕がそのように言う事自体が、奇跡だった。すぐに、手足にはめられていた数珠を外してもらった。

牧師は、最後に、僕に聖書の言葉をくれた。

マルコによる福音書第一章一七節—一八節

【信じる者には、このようなるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い

出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる。】

その時から、僕の生活に変化が起こり、三度の奇跡を体験した。

入院中に迎えた高校三年の夏の大会。野球はできないが何かしたいと思っていた僕は、抽選会に参加したくなった。医師に頼むと、一度は無理だと言われたが、僕が新幹線に乗れるように段取りされ、住まいのリフォームと自家用車の準備も早急に行なわれ、抽選会に間に合うように退院する事ができた。神が働いて下さった!と思った。最初の奇跡だった。

その夏、「熱闘甲子園」というテレビ番組の中で、「交通事故で夢を断られた球児」という紹介で、当時キャスターであった、現日本ハムファイターズの栗山英樹監督が僕を訪問して下さり、励まされた。今も交流が続いている。

家に帰って一か月ほどして、僕と両親は初めて、病院に来てくれた牧師が主催している「ぶどうの木」というグループの聖書勉強会(集会)に参加できた。

ヨハネの第一の手紙第四章一〇節

【わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。】

秋になり、僕は、ほぼ一年ぶりに、教室に戻る事ができた。もちろん、両親の付き添いなしには何もできなかったが。実際に授業についていく事は難しかったが、先生や友人の助けを得て、なんとか頑張った。しかし、皆と一緒に卒業する事はできなかった。一教科を落としてしまったのだ。もう一年やれば、卒業できると言われたが、僕は退学した。

身動き一つできない僕は、ひどい床ずれを起こし、入院せざるを得なかった。その時、牧師が僕の為に祈ってくれた。すぐに床ずれが治り退院できた。二度目の奇跡だった。

高校を卒業していない僕のために、高校卒業認定試験を受けたらどうかと、母が取り計らってくれた。試験会場では、僕一人に試験官が二人付き、一人は問題を見せ、もう一人が、僕の言う通りに答案用紙に書いてくれた。なんと一発で合格し、イエス様の助けを感じた。

三度目の奇跡だった。

高卒資格を得た僕は「サイバー大学」という大学がある事を知った。自宅にいたままパソコンで授業を受ける事ができるのだ。ここなら、僕でも大学生となり、受講できると思った。喜びが満ちあふれ、二〇一二年に入学した。

しかし、高校もスポーツ選手枠で入学し、野球しかやってこなかった僕は、前期の試験でほとんどの単位が取れず、挫折しそうになった。それを察した牧師が、

「諒くんは、嫌々やっているといるでしょ？なんでも、できないと思ったら、それでおしまい。諦めているんじゃない？神の言葉（聖書）に『意志を向けて』聞く姿勢が大事なの。そして、『主にあつてできる！』と言って行う事！完全に癒され立ち上がった時のためにも、今は勉学に励まない！それが信仰です！」

と言ってくれた。僕の心を牧師は全て知っていた。五年間この大学で学び、二〇一七年三月に卒業した。

ある夜、僕の呼吸器のマスクのベルトが外れた。いつもそばにいてくれる母は、風呂に入ったばかりだった。僕は息苦しくなり、もがいた。意識がもうろうとし始めた。

「イエス様！」

と、何度も叫んだ。なんと！母が飛んで来てくれた！助かった！イエス様が母に知らせてくれたのだ！ありがとう、イエス様！

人工呼吸器が外れ、気付かれる事もなく窒息する事故も少くない。生かされた！生きている事、息ができる事、全てが当たり前ではない。神に感謝！これはもう一つの奇跡だった。

聖書の勉強会「ぶどうの木」で、僕の聖書の知識も増えてきた。祖母もイエス・キリストを信じるようになった。毎週家族揃って、学んでいる。

ヨハネによる福音書第一五章五節

【わたし（イエス・キリスト）はぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とながつておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。】

加害者はこの事故以来、責任を感じて、苦しんでいた。その家族も同じだった。憎しみと恨みしかなかった僕たち家族は、聖書が教えている「無条件の赦し」に従い、彼らを心から赦すべきだと考え始めていた。

コロサイ人への手紙第三章一二節―一四節

【だから、あなたがたは、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者であるから、あわれみの心、慈愛、謙そん、柔和、寛容を身につけなさい。互に忍びあい、もし互に責むべきことがあれば、ゆるし合いなさい。主もあなたがたをゆるして下さったのだから、そのように、あなたがたもゆるし合いなさい。これらいつさいのものの上に、愛を加えなさい。愛は、すべてを完全に結ぶ帯である。】

僕たちは加害者とその家族に、「ぶどうの木」の集会に来ないかと誘った。

僕と家族をそのような思いにしてくれたのは、聖書の学びだ。以前はバラバラだった僕の家族が一つになれた事、心が平安でいられる事、色々な苦勞から解放されて元気になった事で、

加害者側の苦悩も考えられるようになったのだ。

加害者の家族は涙を流していた。やはり彼らも、僕たちと同じように苦しんでいたのだ。加害者は心労の為、若いのに髪の毛を無くしていた。父親も、自分が死んで保険金を賠償金にしようと思つたと真剣に考えた事などを話してくれた。病院まで謝りに来て、追い返された加害者の祖父は、当時八四歳だったと知った。牧師は、僕たちに話してくれたように、悪霊の存在や、加害者家族にも平等に注がれている神の愛の話をした。

それ以降、彼らも聖書の勉強に来るようになった。僕たちへの償いのためではなく、自分たちのために聖書を学び始めた。それだけではなく、僕の父の紹介で、父と同じ職場で加害者の父親も働くようになった。加害者と被害者の親が、事故をきっかけに一緒に働くなんて、普通では考えられない事だ。

母は、「人を罪に定め、訴え続けるのは違う。事故の賠償金の裁判を一刻も早く終わらせたい」という思いになり、弁護士に裁判の取り止めをお願いした。弁護士は、

「頭がおかしいのではないか！」
と怒ったが、僕たち家族は聖書の教えに従った。

また母は、病院まで見舞いに来てくれたのに、追い返してしまった加害者の祖父に対して悪い事をしてしまったと、ずっと心に引きずっていた。そんな母に、イエス様は和解の機会を与えて下さった。母が直接会って謝罪した事で、加害者の祖父は、

「もつたいない！」

と涙を流し、背負っていた重荷から解放され、イエス・キリストを信じ、救われた。加害者家族と僕たち被害者家族は、イエス・キリストの十字架の赦しの下に真に和解ができたのだ。

エペソ人への手紙第二章一〇節

【わたしたちは神の作品であつて、良い行いをするように、キリスト・イエスにあつて造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。】

エペソ人への手紙第二章 一三節—一五節

【あなたがたは、このように以前は遠く離れていたが、今ではキリスト・イエスにあつて、キリストの血によつて近いものとなったのである。キリストはわたしたちの平和であつて、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によつて、数々の規定から成つてゐる戒めの律法を廃棄したのである。】

僕たち家族が、イエス・キリストを信じなかつたら、このような事は決して起こらなかつたに違いない。赦す事に働く大きな神の愛と力を実感した。

神は、生きる事に絶望し、将来への不安を抱えていた僕の心を、まず癒して下さった。今も、現実には神は僕に働いている。だから、体も必ず癒して下さると信じている。僕にも、家族にも、また医師にもできないが、神ならできる。この世界と僕を造つたのは神であり、そのひとり子イエス様を十字架の上に、僕たちのために犠牲にして下さる神なのだから、きつと癒してくださる。

二〇一六年の四月九日から、ブログを始めた。僕は手で字が書けない。しかし、あごでパソコンを操作する事はできる。僕は文章を書くのが苦手だ。でも何とかして僕が得た生きる力、赦す力を伝えたい。だから、背伸びする事なく、イエス様と歩んでいる等身大の自分を、そのまま書くこうと思う。僕の「神癒の歴史」の記録として。

あの日、病院ではなく、事故現場で呼吸が止まっていたら、死んでいただろう。僕は生かされたのだ。だから、命を下さつた神様に感謝して、全力で生きる。

絶賛好評発売中!

齊藤 諒の生きる力

四肢麻痺・人工呼吸器装着の僕が伝えたいこと

Ryo Saito **齊藤 諒**



運命を変えて、 天命を生きる!

16歳という若さで四肢麻痺となった著者が綴る、
渾身のノンフィクション。

「死んだほうがましだ! だからといって自分で死ぬ
こともできない……」

この前まで、大好きな野球に明け暮れていた自分が、
こんな身体になるなんて!」

絶望の淵から救ってくれた「聖書」の教え。

苦しみの中で希望を得た著者が今、
この時代を生きる人たちにもっとも伝えたいことを
書く。

四六判・並製・176頁 定価(本体1,000円+税)
文芸社【東京都新宿区新宿 1-10-1】

ご注文は、お近くの書店でお取り寄せいただくか、ブックサービス(☎0120-29-9625)
への電話注文、ネット書店にお申込み下さい。